Lab File

研究室紹介

東京工芸大学には約200の研究室があります。でも、どんな研究が行われているのかご存知ないのでは?
えーっ!! こんな研究してたの!? なんていう新しい発見がアルカモ。

Date　　No.

工学部 建築学科 Faculty of Engineering / Department of Architecture

建築史研究室

じっくりと深く、建築について考える

建築という学問は実に幅が広く、奥が深い。この「建築史研究室」では、工学部でありながら文系に近い研究を行っている。

「建築は、その国の歴史や文化、風土、政治、宗教、美学、生活様式など、人間の営みすべてが反映された重要な文化遺産です。その成り立ちを調べ、それが歴史や社会の中でどのような意味をもってきたかを考えるのが建築史です。私は19世紀ドイツ・オーストリアのミュージアム(美術館・博物館)建築に関する博士論文を執筆し、現在は主に19-20世紀ドイツ語圏の建築・都市の研究に多角的に取り組んでいます。建築はその時代の人々の様々な想いが凝縮されている。それを研究することは本当に楽しい」と海老澤准教授。

卒研生たちも自分が目にする建築や都市はいかにして成立してきたか、その背景を文献や建築の調査を通して考える。人間の営みの象徴ともいえる建築を研究することによって、建築とは何か・日本とは何か・近代とは・文化とは・人間とは・それらのことを深く考えることになる。そして自ら卒業研究のテーマを決め、論文にまとめる。テーマは多種多様だが海老澤准教授は個性があっていいという。

「人まねではなく、自分の考えを表現するように指導しています。じっくりと深く考えること。それは大学時代に一番重要なことだから」

海老澤(えびさわ) 模奈人(もなど) 准教授

珍しい名前はドイツの哲学者ライプニッツの言葉から命名。東京大学工学部建築学科を卒業後、同大学院博士課程在学中にウィーン工科大学(オーストリア)とミュンヘン工科大学(ドイツ)に留学。西洋建築史の研究を重ね、2005年本学に着任。趣味も建築について考察すること。建築を訪ね歩き、授業や研究のアイデアを練るのを楽しみにしている。

建築・権力・記憶
(ナチズムとその周辺)
ヴィンフリート・ネルディンガー著
海老澤 模奈人　訳

ミュンヘンの彫刻館
グリプトテーク

芸術学部 アニメーション学科 Faculty of Arts / Department of Animation

古川ゼミ(通称タクゼミ)

「アニメーション南蛮屏風」をポルトガルで展開

「日本で始めてのアニメーション学科として誕生してから8年、クオリティが高くなっていますね。先輩たちが大きな賞を受賞するなど、社会で高く評価されるようになりました。そうした姿が後輩たちのモチベーションを上げていると思います」と古川教授。日本を代表する作家がリードしてきたアニメーション学科。この古川ゼミでは今、画期的な企画が進行中だ。

種子島に鉄砲を伝来させ、日本に始めてヨーロッパ文化を持ち込んだポルトガル。2010年は日本とポルトガルの修好150周年にあたる。これを記念して外務省との企画で進められているのが「アニメーション南蛮屏風」。この前代未聞の屏風で物語られる金色のアニメーションをポルトガルに持ち込んで、日本の現代の文化、風俗を紹介しようという企画だ。現代のヨーロッパの人々に日本人が150年前に受けたような衝撃を与えようというもの。10月から11月にかけて、ポルトガルの各地で行われる大きなイベントに「南蛮屏風」はプロジェクション展示される。また、夏休みには吉祥寺で行われる、まちぐるみアートと音楽のまつり「きちじょうじのなつやすみ」でも展示・上映される。

「南蛮屏風は4年次生全員で作った作品です。3年次生全員で作った作品も『きちじょうじのなつやすみ』で上映されます。学生は個人でも作品を作っていますが、みんなで一つの作品を作るというのもこのゼミの方針です」と橋本助教。第一線で素晴らしい作品を世に出し続けている古川教授は「先生が頑張って作品を作っている姿を見せるのが一番の教育だと思う」と語った。

アニメーション南蛮屏風

古川 タク 教授

イラストレーター。アニメーション作家。シンプルな画風とユーモア溢れる作品で世界的評価を得る。アニメーションの第一人者。アニメーション学科設立時から教授や学科主任として活躍。現在は客員教授。

橋本 裕充 助教

東京工芸大学芸術学部映像学科卒業。映像を学ぶ傍ら在学時より音楽活動を開始、楽曲のアレンジ、アルバムの企画・制作、レコーディングエンジニアとして活躍。本学の卒業生として学生と古川タク先生を結ぶ頼もしい先輩先生。